

新約単篇 ヨハネによる福音

私が愛したように

ヨハネ 13 : 34, 2テモテ 1 : 3-4

今日は二本立てで、今から 25 分の聖書講義をすると、皆さんを疲れさせるでしょうから、短い感想と勧めにしておきます。主題は、本当はヨハネ福音書から (13 : 34) ですが、テーマのヒントに第 2 テモテ書の 1 章から、3 節と 4 節を読みます。

3. わたしは、昼も夜も祈りの中で絶えずあなたを思い起こし、先祖に倣い清い良心をもって仕えている神に、感謝しています。4. わたしはあなたの涙を忘れることができず、ぜひあなたに会って、喜びで満たされたいと願っています。

使徒パウロがテモテに送った言葉です。この時、これを書いているパウロはローマの獄中に、後輩のテモテは多分エフェソ教会の牧者の一人として、神の人として、福音を教える立場にあったものと思います。そのテモテをいつも心にかけて、「昼も夜も祈りの中で絶えずテモテを思い起こし」ている信仰の先輩が、ハートを注ぎ出すようにして書いたのが、このテモテへの書簡です。

そのパウロはテモテの涙を忘れることができない……と言いました。私たちは使徒行伝を読んだ者として、テモテ自身が先輩の涙を覚えていたに違いないと思います。テモテからパウロへの手紙というのは残っていませんから、テモテの方の気持ちはどんな言葉になったものか分かりません。パウロのペンから想像する外はないのですが、「ぜひあなたに会って、喜びで満たされたい」というパウロの言葉を原作で読むと——《 ἐπιποθῶ σὲ ἰδεῖν 》——君に会いたい激しい思いを押さえ兼ねている——まるで若い恋人同志でも使

私が愛したように

うような、切々たる思いが吐露されているのに驚きます。

パウロはそれほどテモテを大事に思っていたのです。パウロがキリストから受けた愛が、連鎖反応を起こしてテモテに注がれたとしか言いようがありません。これはテトスに対しても、シラスに対しても同じだったのかも知れませんが、私たちにはこのテモテ書の言葉が強い印象を残すのです。

2週間あまり前、5月の30日に、私を知っていてくれる三人の人が、アテネのヤシウ町1番地の放送スタジオに集まりました。三人とも去年まではお互いに面識もなかった人たちです。私とは不思議と、信仰と友情で長いつながりを頂いています。でももしキリストが結び合わせて下さらなかったなら、スパルタの女性とアテネの学者と福岡出身の牧師とは会うことはなかったでしょう。

三人は去年の9月に録音したインタビューのテープの編集を仕上げ、ラジオの40分番組にまとめる仕事をしていたのです。そのテープというのは、私がイエス・キリストを信じて聖書を学ぶようになったいきさつ、原典で新約聖書を読めるようになりたくてアテネに前後二回、家族を日本に残して約3年ギリシャ語の修行に来たこととか、珍しい話としては、去年知り合った中国人の求道者との出会い、未来の中国を変えるのは、外の世界を知って中国へ帰る若者たちの力ではないか、それも聖書を読んでキリストに触れた人たちでなければならぬ。そんな話を、22年前に哲学部で机を並べたことのある婦人アナウンサーの問いに答える形で語ったものです。

当時はまだ、東ヨーロッパの自由化がそんなにすぐ来るとは思えなかったものですが、それでも、ハンガリーでは既に新しい風が吹き初めていました。でも中国はまだまだです。中国にはヨーロッパに残っている基礎——聖書とキリスト教の土台がない。まず神に愛された個人が生まれなければ、ハンガリーなどとは一緒には考えられません。天安門事件の記憶がまだ生々しかっ

た頃でしたから、そんな私の言葉に、宗教番組のディスクジョッキーもしているエヴィエニアさん（Κα. Εὐγενία φίλου）はとても興味を覚えてくれた様子でした。もちろん、ベルリンの壁が崩れ始めるなど、誰も考えていなかった時点です。

「織田さん、放送が出たら、テープを送るから」という彼女の言葉にも拘わらず、そのテープはなかなか来ないまま年を越しました。何しろ22年話す機会もなかったギリシャ語を、急にマイクを突き付けられてしゃべったのですから、流暢なわけがありません。モタモタしながら、考え考え、とてもゆっくりしゃべりました。ですから私としては、ボツになったのだろうと諦めていたんです。家内は私を慰めようとして、「あんた、あの時は杉山さんの小型のラジカセ借りて急にやったさかい、音質も悪いし、スタジオで編集のしようがなかったんちゃうの？」と言ってくれました。でも、あの時は、彼女が取材に持って来た器械の方はもうひとつお粗末だったので、杉山さんが「これの方がマシでしょう」と言って、わざわざ貸してくれたのでした。「あれは絶対ワシのギリシャ語が下手やったからや。それでボツになったんや。」口には出しませんが、家内にも言いませんでしたが、一昨日までずっと考えていました。

ギリシャ教会放送部がどうして急に、古いテープを引っ張り出したのか…
…。東欧諸国の情勢の変化から、中国に対する関心がまた高まったからか…
…。それとも私の師匠であるアテネ大学名誉教授の出演の交渉とお時間を頂くのに、8箇月待ったのか……。日本と違って外国の時計はゆっくり回ります。こうして5月30日の録音と仕上げになりました。杉山さんは6月3日にオンエアされたのをラジカセで取ったそうですが、元々その同じ器械で取ったのがまた元の所に、ブーメランみたいに戻って来た訳です。彼は当日はスタジオの副調室でノンビリ見物するつもりで行ったのですが、急に「日本からこんな遠い所まで何の勉強に来たのか話してくれませんか……」とエヴィエニアさんから言われて、彼の言い方では「言葉を選ぶ間もなく」インタビ

私が愛したように

ューの形で二三分出演させられたのです。こうして、私の下手なギリシャ語もボツにならず、杉山世民さんのギリシャでの8カ月の研鑽の成果も盛り込んで、五旬節の日曜日の夕方6時に全国放送の電波に乗りました。

その番組で、私を紹介する意味でシオーティスさんが、30年前にさかのぼる東洋の果ての若者との出会いと、共に主キリストを仰ぐ信仰のことやいろいろ、やはりエヴェニア・フィールさんとの対談でお話しくれました。一方は私の神学部の先生、もう一人は私の哲学部の同級生。キリストにあってそれぞれ30年と20数年の交わりです。その方たちがマイクを挟んで私のことや、日本で聖書とキリストが生きているという話をして下さったのです。この教会のこともお話の中に出たと思います。師匠のシオーティスさんは普通のギリシャ人とは違って、私がギリシャ正教会に属していなくても、同じ主の血で贖われた兄弟として尊重して下さる方です。杉山さんの手紙には、「ほとんどオダさんのこと……涙を流しながら話しておられました。」

杉山さんが書いたその字をみながら、テモテ書のパウロの言葉を思い出していました。「わたしは昼も夜も祈りの中で絶えずあなたを思い起こし、先祖に倣い清い良心をもつて仕えている神に感謝しています。」……そんなに思い起こして頂く値打ちのない、平凡な者です。学問上の業績もないし、伝道の実績もない。ただ単にマタイから黙示録まで全部自分で読んでみたかった。学んだ限りで聞いて下さる方に伝えてみたかった。それだけです。残ったのは自分のノート約8,000頁と、それに、この30年間にシオーティスさんから頂いた手紙数十通と、私からアテネへお送りした手紙と、それだけなんです。それでも、私を大事にして下さって忘れずに祈っていて下さるのです。テモテがあのエフェソの教会で、どんな時にも勇気を持って務めを果たせたのは、遠いローマから祈りで支えてくれていた先輩がいたからでした。

イエス・キリストの愛は人間の介在を必ずしも必要としません。別に人間の愛の支えなど無くても、各人が御言葉から直接受け止めて、それで信仰と

私が愛したように

勇気を持てるものです。しかし、もしあなたにも誰か一人、そんな風にして祈りの中で忘れずにいてくれる友か先輩がいたら……それは神の愛の小さなヒントかミニチュアか影みたいなものでしょうが、それでも何かリアルにその愛を膚で感じさせる力を持つに違いありません。そして、もしあなたが誰かの愛と祈りで支えられる経験を本当になさったら、次はあなたにもきっと連鎖反応が起こって、今度はあなたが誰かもう一人のテモテのために、パウロの役目を果たす人に変えられて行くのです。そんなことは有り得ないと思いますか……？ それが有るのです。ヨハネはキリスト御自身のお言葉をこう伝えていきます。

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

先日来、中国から私どもの聖書学院へ聴講に来たいという方がいて、南京の近くの大学で日本語の講師をしているクリスチャンの先生の紹介で、問い合わせが来ていたのです。日本で聖書と教会史を勉強したいと、その方は言われるのですが……。でも、その方がどんな人かもよく分かりませんから、教師たちもそう気軽に肩入れもできません。果たして私たちと一緒に生活できる人なのだろうか……。日本語を今まで一二年やって、仮に中国で先生の特訓を半年受けたとしても、その日本語でローマ書の講義とか、宗教改革の歴史を聞いて消化できるとはとても思えない。それに今の学院のルールでは、正科生以外の人を寮に受け入れることはできない。そんな意見も出て、その話が立ち消えになりかけた時に、ある兄弟がポツリと一言こう言いました。「ギリシャのクリスチャンが……してくれたのですから……。」この話、うまく進むかどうかは別として、こういうことはみんな、連鎖反応になって続いて行くものです。「私があなたを愛したように」と主が言われたのは、そのことなのです。

(1990/06/17)

《研究者のための注》

1. 「スパルタの女性」は、実は古代スパルタの西 Καλαμάτα 出身の Κα. Εὐγενία φίλου です。この人については1989年9月21日の「アテネの不思議な十一日」の2. 「中国の未来について語る」の項を参照してください。彼女は公立高校の国語教師をしながら、ギリシャ教会伝道部で働いています。
2. 「アテネの学者」はアテネ大学名誉教授 Κ. Μάρκος Α. Σιώτης. 同上スピーチの1. 「父でもあり兄でもある方に会う」及びヨハネによる福音第49講「全く新しい命令」を参照。
3. 「福岡出身の牧師」は大阪聖書学院教師で守口キリストの教会牧師杉山世民氏。1989年9月17日の「主が道を開いて下さる」の2項にギリシャ留学時のいきさつが語られています。
4. 「今日は二本立てで」と言いましたのは、当日このスピーチの前に、金城恵子姉が所沢市の日本児童伝道学院での6週間の研修の結果を報告されたためです。